特別寄稿

特別寄稿

番場俊氏の拙著『バフチン』書評に答えて

北岡誠司

編集委員会からのお誘いに応え、拙著『バフチン』への番場俊氏の書評(31号)に関し、二、三所見を述べさせていただく。書評全体に関し述べる紙幅はないので、氏が「困惑させる論点の曖昧さ」と指摘した点に限り、若干補足説明をしておきたい(氏の記述順とは不同。「」内は氏の文の引用。〈〉は拙著からの引用。()内はその頁。[]は補足。『』はここでは論文表題)。

①「グロイスのバフチン批判」(独文『残酷なカーニヴァル——バフチン、スターリニズムを“審美的に正当化”』, 1989。著者による露訳『カーニヴァルの全体主義』。邦訳『スターリンとディオニュソスの間で』)。これに関し〈今日にいたるまで、その刺激的で挑発的な性格を失っていない〉と拙文が述べながら「それにいかなるかたちでも応答していないのでは、対話的誠実さを欠く」と氏は「評価」する(下線北岡)。だがこの「評価」は返上したい。二重に応答しておいたはずだからだ。

A. バフチンがスターリン言語論に対し自らの立場を〈対立〉させこれを〈補完〉しようとした発話・対話論こそ(176-79頁の引用参照)、〈バフチンとスターリニズムとの関係という問題を考える際、充分に考慮されねばならない点〉だと拙著では指摘しておいた(179)。この問題でまず考慮すべきは、『バフチン著作集』第5巻が明らかにした、バフチン『発話ジャンルの問題』に認められるスターリン言語論との関

連の事実だが、グロイスの論は、これを考慮に入れうる段階以前の批判である。グロイスのようにカーニヴァル論で批判する前に、まず確かな資料が出た発話・対話論でバフチン/スターリン問題を考えるのが手順だ。この二点が上記拙文の含意である。“だがグロイスには言及していないではないか!”との反論には、それも〈対話者双方の言葉がテキストとして客観的に与えられている〉(243)場合のみが対話だと考える、バフチンの論敵ヴィノグラードフと同じ立場にたち、〈公然たる論争〉のみを論争と見る類の態度だと言いたい。公然たる論争では論者(北岡)の言葉は、論駁すべき他者(グロイス)の言葉に言及し、それを指示対象とする。が、バフチンのいう〈秘かな内的論争〉では、論者の言葉は、専ら指示対象(スターリン言語論/バフチン発話論)を示し、この〈指示対象に向かってゆく。他者の言葉とは[この]指示対象の上で見えざる形で衝突する〉(244)。そのことで〈先行する他者の発話に応答する〉(214)。因に、笑いに関しグレマス図式を援用した、バフチン/プロップの対比も(312)、間接的には、アヴェリンツェフ『笑いに対するロシア的態度』への秘かな応答である。バフチンは自ら論述した内容をまま自ら実演すると指摘しておいたが(171-73, 179, 215)、拙著も自ら紹介した〈秘かな論争〉を同じようにまま実演する。B. “だがグロイスが論じたのはカーニヴァルではないか!”この反論へは、バフ

ロシア語ロシア文学研究 32 (2000)

チン『ラブレ論』の内容紹介で、異版を指摘した後は、専らカーニヴァル論のみに限定したという点にある(403-09)と応答したい。グロイス風に批判する前に、まずはバフチン自身のカーニヴァル論の組み立てられ方をそれとして確認しておくべきだというのが、その含意である。また、バフチンがスターリン体制下の民衆像とは異質な民衆像を構成し、これに対置した点に「スターリンの政策への批判として、賞賛すべき」だと評価する Berrong の一文を訳出しておいたのも(423)、グロイスのそれとは違う、バフチン民衆像の捉え方・評価の仕方があることを具体的に示す狙いも含意する。なお知識人バフチンがカーニヴァルの〈広場の群集〉という巨大な他者に対し、一方でそれとの一体化を希求しながらも、他方でそうした他者のうちに不法に自己を投棄してはいない、という自他関係に関する指摘も参照(383-84)。

②氏によると「バフチン言語哲学」は「言語的交通においてはその全体を見通す超越的・事後的な第三者の視点が原則的に阻まれている」との「認識から出発している」という。この判断を根拠に、氏は拙著の〈言語コミュニケーションの図式〉(166)は「あまりに不適切なものとうつる」と見る。

だがバフチンはこう述べている。〈他者どうしの二つの発話が、互いに何も知らずに対置された場合でも〉〈同一のテーマに触れてさえいるなら、両者は不可避に対話的關係にはいる〉(169)。かく言う時、論者バフチンはどこに位置しているのか。具体的に考えてみるために、この一般論を芥川『藪の中』の三者の証言という具体例に翻訳して考えてみると、夫・妻・盗賊が互いに自分以外の証言内容に関し何も知ら

ずに証言し、その結果(証言)が対置された場合でも、同一のテーマ(夫の死に誰が手を下したか)に各々が触れてさえいるなら、かれらの証言は互いに〈不可避に対話的關係にはいる〉。ではこのように具体例に適用した時、論者バフチンはどこに位置しているのか。作中人物たちが位置する証言の場、物語世界に内在する場所ではない。むしろ読者の位置、作品の解釈者の立場に立つ。物語世界の外に居て(外在・超越)、三人の証言を読み終え(事後)、各々の証言が互いの証言内容を知らぬままなされたにもかかわらず、同一テーマに触れているが故に〈不可避に対話的關係にはいる〉と、三者の証言「全体を見通」して「認識」する「第三者」つまり読者・解釈者・人文学者の立場である。しかも対話概念のこの拡張、面と向かわずに交わされた発話も同一テーマにかかわるなら対話的關係に入るといふ拡張に、バフチン対話論に特有の独自性がある。そこでこの読みに合致しない、氏のいう「認識」も「バフチン言語哲学」観も、私は採らない。それを根拠にした〈図式〉批判も返上したい。ただ氏が前提とする前田言語論は本が未入手なので、別にバフチン論を書く際、そちらで改めて触れたい。右の問題だけではなく、バフチンとソシュール-ヤコブソンとの関連も含めて。またフロイト第二局所論に関しては、岩波講座『現代思想』9所収の拙論で言及したプティトーのプレグナンツ論(153他)を参照されたい。ラカン/バフチンに関しては、授業で講じてきた、前者の『盗まれた手紙』論をダシにして、いずれ書く予定である。そこでは第二局所論と物語論との関連づけも試みる予定。

(きたおか せいじ・奈良女子大名誉教授)